

別紙 4

報告番号	※ 乙 第	号
------	-------	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 心理尺度短縮版作成における IRT の活用に関する研究

氏 名 並川 努

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の全体を通しての目的は、心理尺度短縮版の作成方法について、具体的な事例をもとに検討することである。

心理尺度を用いた測定は様々な場で行われている。しかし、調査には時間的な制約があったり、回答者にかかる負担を少しでも減らす必要があったりするため、項目を減らした短縮版尺度が作成され、利用されることも多い。しかし、短縮版尺度をどのような情報をもとに作成すべきかについては、十分な検討がなされているわけではないのが現状である。

そこで本研究では、まず心理尺度短縮版作成の国内外の状況について検討した上で、実際に複数の尺度を取り上げ、短縮版を作成する試みを行うことを通して、短縮版の作成方法について検討を行った。なお、本研究では、従来の古典的テスト理論に比べ、尺度や項目に関する精緻な情報が得られると考えられる **Item Response Theory** (以下、IRT) に注目をし、短縮版作成を行った。また、IRT を用いた方法と、因子分析を用いた方法の比較を行い、それらの違いについて検討を行った上で、短縮版作成方法についての今後の課題について指摘を行った。各章で行った検討の具体的内容は以下の通りであった。

別紙 4

まず第 2 章では、心理尺度の短縮版がどのように作成されているのかについて、レビューを行った。心理尺度短縮版は、調査や研究において多く利用されているが、その作成方法については必ずしも十分な検討がなされているとは言えない。実際に短縮版作成においてどのような方法が多く用いられているかについては、Goetz et al. (2013) によって英語論文を対象にしたレビューがなされており、因子分析を用いた方法などが多く用いられていることなどは示されているものの、日本国内での状況等は明らかになっていない。そこで、データベース (CiNii, J-Stage) を用いて論文を抽出し、日本における短縮版尺度の短縮版作成研究の数や短縮化による項目数の削減率、短縮版の作成方法等についてレビューを行った。その結果、近年になるほど、短縮版作成の研究数が増えていることや、85.7%にあたる論文において、因子分析の結果を利用した項目選択がなされていることなどが示された。また、先行研究と比較し、因子分析が多く用いられていることや、IRT を用いた研究が少ないことなどが指摘された。

第 3 章から第 5 章では、IRT を用いて心理尺度の短縮版を実際に作成することを通して、具体的な課題の検討を行った。まず第 3 章では、子ども用の抑うつ尺度 (DSRS-C) を取り上げた。小学 3 年から中学 2 年までの 4683 名を対象に行った調査データをもとに、IRT のパラメタを推定し 18 項目から 9 項目を短縮版として選択した。その上で、作成された短縮版の信頼性および妥当性について検討し、実用水準で十分な信頼性・妥当性を備えていることを確認した。

また、第 4 章では国内で用いられるパーソナリティに関する尺度の中でも利用頻度の高い尺度の一つとして和田 (1996) の Big Five 尺度を取り上げ、短縮版作成を行った。2099 名のデータをもとに推定した slope パラメタと location パラメタをもとに 29 項目 5 件法の尺度が作成された。また、外在基準として同じ 5 因子モデルの尺度である NEO-FFI との相関を検討することで作成された短縮版の妥当性の検討を行った。その結果、作成された短縮版はオリジナル版と同様の相関等を示し、十分な信頼性・妥当性を備えていることが示された。

別紙 4

第 5 章では、新たな尺度として「過去の自己」と「現在の自己」とを比較する程度を測定する継時的比較志向性尺度を作成するとともに、その短縮版を作成し、検討を行った。まず、社会的比較に関する先行研究をもとに、継時的比較志向性尺度を作成し、信頼性・妥当性の確認を行った。その後、934名から得た回答をもとに、IRT を適用した分析を行い、オリジナルの 11 項目に対して、5 項目からなる短縮版が作成されるとともに、当該尺度が短縮版として十分な信頼性、妥当性を持つことが示された。

第 6 章では、3 章から 5 章までの間で取り上げた尺度を用いて、因子分析をもとに短縮版の項目選択を行う方法と、IRT を用いた方法との比較を行った。その結果、いずれの方法で作成された場合においても短縮版として選択される項目は共通するものが多く、ほぼ同程度の信頼性や妥当性を備えた尺度が作成されることが示された。また、得点算出方法についても検討を行った。具体的には、従来多く用いられているように各項目の合計点を用いる場合と、IRT の θ を用いる場合との比較を行った。いずれの方法においても、得られた得点間の相関は非常に高く、同様の値が得られることが示唆された。

これらの研究結果から、IRT を用いた方法も短縮版作成に有用であることが示された。しかしながら、本論文で行ったものは基礎的な検討にとどまっているため、IRT のパラメタ推定のプロセスや IRT のモデルの選択等においても課題が残っている。また、目的に応じた柔軟な短縮版作成や、短縮版作成方法のガイドラインの作成などの検討も今後必要であることが指摘された。